

## 四君子考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏井, 高人 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19131">http://hdl.handle.net/10291/19131</a>

## 四君子考

夏井 高人

### 序

『四君子』という言葉がある。「梅・竹・蘭・菊」を意味すると一般に解されている。しかし、疑問に思ってきた。そして、山田哲平氏の古稀記念論集に寄せる論文の題材として最適であると考えた。

それは、同氏が絵画と音楽をこよなく愛し、かつ、その真贋と真価に常にこだわり続けた哲学の人の一人だからである。とりわけ、蘭を題材とする南画や櫻と関連する文学作品等に対する同氏の造詣には深いものがある<sup>1)</sup>。

しかし、筆者は、日本文学や歴史学を専攻する者ではない。あくまでも素人の随筆もどきの一種として「四君子」に関する感想めいたものを述べ、山田哲平氏の古稀祝賀としたいと思う。

### 1 一般的な理解

『広辞苑（第六版）』には、「四君」の説明として、「①中国、戦国時代の、齊の孟嘗君、趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君。戦国の四君。②秦の穆公・孝公・恵王・昭王。」とあり、「四君子」の説明として、「(その高潔な美しさを君子にたとえていう) 中国・日本の絵画で、梅・菊・蘭・竹の総称」とある。『大辞林（第二版）』には、「四君」の説明として、「中国戦国時代の、齊の孟嘗君、趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君の四人の称」<sup>2)</sup>とあり、

「四君子」の説明として、「〔気品に満ち、風格があるところからいう〕東洋画の画題で、蘭・竹・梅・菊のことをいう」とある。そして、『大日本百科事典ジャポニカ（第8巻）』には、「四君子」の説明として「おもに東洋画の題材とされている竹・梅・菊・蘭の総称。草木の中でも気品が高く、君子のような風格をもつことから生まれた呼称で、中国の元代から文人墨客が好んで題材とした。絵画の修練もこの四君子を描くことにはじまるとされた。数多い絵手本のうち、渡辺華山の『四君子自画賛』はとくにすぐれたものとされた。〈永井信一〉」とある<sup>3)</sup>。

## 2 「四君」

上述のとおり、「四君」の意義については、中国戦国時代の四君をあげる見解と秦の四君とをあげる見解とがある。

そこで、「四君」の用例を調べてみると、前漢（西漢）の賈誼『新書』巻一の「過秦上」に「當此之時 齊有孟嘗 趙有平原 楚有春申 魏有信陵 此四君者 皆明智而忠信 寬厚而愛人 尊賢重士」とある。また、司馬遷『史記』本紀の「秦始皇本紀」には、「當是時、齊有孟嘗、趙有平原、楚有春申、魏有信陵。此四君者、皆明知而忠信、寬厚而愛人、尊賢重士」とある<sup>4)</sup>。賈誼（前200年～前168年頃）は、漢の太宗・文帝の時代の人であり、司馬遷（前145年頃～前87年頃）は、漢の世宗・武帝の時代の人なので、「四君」に関する『史記』の記述は『新書』の記述に依拠するものと考えるのが妥当である<sup>5)</sup>。

他方、宋代の『太平御覽』皇王部二「敘皇王下」には、「鄧子曰 堯置敢諫之鼓 舜立誹謗之木 湯有司直之人 武有戒慎之銘 此四君者 聖人也（堯は、敢諫の鼓<sup>6)</sup>を置き、舜は誹謗の木<sup>7)</sup>を立て、湯は公正な人であり、武は戒慎を旨とした。この四君は、聖人である）」とある。この記述は、中国戦国時代の『鄧析子』の「轉辭」から転用したものと推定される<sup>8)</sup>。また、

『淮南子』の「主術訓」には、「古者天子聽朝 公卿正諫 博士誦詩 瞽箴師誦 庶人傳語 史書其過 宰徹其膳 猶以為未足也 故堯置敢諫之鼓 舜立誹謗之木 湯有司直之人 武王立戒慎之鞀 過若豪厘 而既已備之也」とある。

「齊の孟嘗君，趙の平原君，楚の春申君，魏の信陵君」は中国戦国時代の人であるので，それよりも前の時代においては古代の「堯，舜，湯，武」が「四君」であり，その後，漢代になって，「齊の孟嘗君，趙の平原君，楚の春申君，魏の信陵君」をあてられた「四君」の概念が定着し，現在まで伝わったと推定するのが合理的ではないかと考えられる<sup>9)</sup>。

そして、『史記』の「平原君虞卿列傳」と「是時齊有孟嘗 魏有信陵 楚有春申 故爭相傾以待士（その当時，齊には孟嘗があり，魏には信陵があり，楚には春申があり，互いに争って武士を募っていた）」と記している。この文の流れからすれば，「君」は，「殿様」程度の意味しかない。

他方において，孟嘗君，平原君，春申君及び信陵君は，年々強国となる秦の圧迫を受け，秦と対抗するために，ありとあらゆる戦略を考え，提唱し，とりわけ，合従策を実行したという点で共通している。しかし，それぞれ宰相であり，君主（王）ではなかった。それゆえ，君主（王）が愚かである場合には，不遇となったという点でも共通している。このような出来事は，知性において非常に優れており，政治的能力に長け，それなりの財力のある者だけに発生することである。それゆえ，司馬遷は，この4名の「君」に特に注目したのではないかと考えられる。

### 3 君子としての四君は成立するか？

古代の「堯，舜，湯，武」及び秦の「繆公，孝公，惠王，昭王」はひとまず措き，齊（田齊）<sup>10)</sup>の孟嘗君，趙の平原君，楚の春申君及び魏の信陵君について考えてみる。なお，欽定四庫全書版の『史記』列傳では「孟嘗君列傳」，

「平原君虞卿列傳」、「魏公子列傳」及び「春申君列傳」の順となっているので、以下、その順に述べる<sup>11)</sup>。

### 3.1 齊（田齊）の孟嘗君

『史記』列傳の「孟嘗君列傳」の冒頭には、「孟嘗君名文 姓田氏 文之父曰靖郭君田嬰 田嬰者 齊威王少子而齊宣王庶弟也（孟嘗君は、名を文といい、姓は田氏。文の父は靖郭君田嬰という。田嬰は、齊威王の末子にして齊宣王の庶弟である）」（中略）「初 田嬰有子四十餘人 其賤妾有子名文 文以五月五日生 嬰告其母曰 勿舉也 其母竊舉生之 及長 其母因兄弟而見其子文於田嬰 田嬰怒其母曰 吾令若去此子 而敢生之 何也 文頓首 因曰 君所以不舉五月子者 何故 嬰曰 五月子者 長與戶齊 將不利其父母 文曰 人生受命於天乎 將受命於戶邪 嬰默然（さて、田嬰には子が40人余りあった。賤しい妾に文という名の子があった。文は5月5日生まれである。田嬰は、その母に『産んではならぬ』と言った。その母は密かに生んで育てた。文の母は、その兄弟と並ばせて文を田嬰に見せた。田嬰は、怒り、その母に『私はその子を殺せと言ったはずだが、あえて産んだのは、何故だ』と言った。文は、頓首し<sup>12)</sup>、「殿様が5月の子を産ませてはならぬと言ったのは何故ですか」と言った。田嬰は、『5月生まれの子は門の戸よりも背が高くなって、その父母に不利益を与えることになるからだ』<sup>13)</sup>と言った。文は、『人は天の命を受けて生まれるもので、門の戸の命を受けるものではありません。』と言った。田嬰は、沈黙した）」とある。

そして、「孟嘗君列傳」によれば、その後、田文（孟嘗君）は、父である田嬰を諭し、武士を蓄えて国力を増すことを進言した結果、田嬰から家政を任されることとなり、田嬰の死後は領地を継ぎ、多数の食客を抱え、孟嘗君と呼ばれるようになった。秦の昭王は、孟嘗君が賢者であると聞き、孟嘗君を賓客として招待した。その真意は、孟嘗君を殺してしまうことにあった。しかし、孟嘗君は、秦に入国した後、身の危険を察し、偽名を用いて秦を脱

出ることとなった。そして、「夜半至函谷關 秦昭王後悔出孟嘗君 求之已去 即使人馳傳逐之 孟嘗君至關 關法雞鳴而出客 孟嘗君恐追至 客之居下坐者有能為雞鳴 而雞齊鳴 遂發傳出 出如食頃 秦追果至關 已後孟嘗君出 乃還（夜半になって函谷関に到着した。秦の昭王は、孟嘗君を逃してしまったことを悔しみ、探してみたけれども立ち去った後だった。そこで、人を遣わして、関に至るまで孟嘗君を早馬で追わせた。孟嘗君は、関に到着したが、鶏が鳴くまでは関の外に通行人を出さないという法令になっていた。孟嘗君は、追い付かれるのを怖れた。その食客の中に鶏の鳴きまねをするのが上手な者があり、そうすると一斉に鶏が鳴きだした。その結果、関の外に出る許可を得ることができた。関を出てからほどなくして、秦が関まで追い付いたが、孟嘗君が関の外に出てしまった後だったので、帰還した）」とある<sup>14)</sup>。

孟嘗君が、秦から齊に帰国すると、自らの失策に気づいた齊の湣王によって宰相に迎えられた。その後、讒言によって宰相をやめさせられると、孟嘗君の3,000人も食客は、去ってしまった。その後、孟嘗君が宰相に返り咲くと、食客も戻ってきた<sup>15)</sup>。

思うに、人が富貴であり、立身出世の見込みがあるときには有象無象の者が群がり寄ってくるが、その富と地位を失えば、たちまちにして蜘蛛の子を散らしたように去ってしまう。芥川龍之介『杜子春』のとおりである。

司馬遷は、「孟嘗君列傳」の末尾において、太史公曰くとして、「吾嘗過薛其俗閭里率多暴桀子弟 與鄒魯殊 問其故 曰 孟嘗君招致天下任俠 姦人入薛中蓋六萬餘家矣 世之傳孟嘗君好客自喜 名不虛矣（かつて私が薛を通ったとき、その街の風俗には乱暴な者が多く、鄒や魯とは異なる。問うてみると、『孟嘗君が天下の任俠や罪人まで招致して薛に入れたからだ。当時は6万軒余りの家があった』のだという。世に、薛が食客を好んで自慢したと伝えられているのは、決して嘘ではなかったのだ）」と評している。必ずしもよい評価とは言えない。司馬遷は、孟嘗君について、「君子である」と評価

しているとは認め難い。孟嘗君は、「聖人」ではない。

### 3.2 趙の平原君

『史記』列傳の「平原君虞卿列傳」の冒頭には、「平原君趙勝者 趙之諸公子也 諸子中勝最賢 喜賓客 賓客蓋至者數千人 平原君相趙惠文王及孝成王 三去相 三復位 封於東武城 (平原君趙勝は、趙の公子の1人である。公子達の中でも最も賢明であり、賓客を好んだ。賓客の数は数千人に及んだ。平原君は、趙の惠文王と孝成王の時代に3度宰相の地位を去り、3度宰相に地位に戻った。東武城に封ぜられた)」とある。ここでも、趙勝(平原君)が王の血筋をひく者であり、かつ、知者であることと食客を多数抱えていることが重視されている。

そして、「平原君虞卿列傳」は、「平原君以趙孝成王十五年卒 子孫代 後竟與趙俱亡 (平原君は、趙の孝成王の15年に死んだ。子孫が継いだ、その後、趙の滅亡と共に滅びた)」とした上で、太史公曰くとして、「平原君翩翩濁世之佳公子也 然未睹大體 鄙語曰 利令智昏 平原君貪馮亭邪說 使趙陷長平兵四十餘萬眾 邯鄲幾亡 (平原君は、蝶が舞うが如く、濁世に稀な貴人である。しかしながら、大勢を見る目がなかった。俗に『欲は智を眠らせる』というが、平原君は、馮亭の邪な見解を貪り、長兵の趙の兵士40万余を失い、邯鄲は滅亡に瀕することとなった)」と記している<sup>16)</sup>。

平原君は、趙の公子達の中では最も優れていたかもしれない。また、その容姿も頗る端麗であったかもしれない。その意味で、平原君は、「氣品のある高貴な者」の範疇に含まれ得る。

しかし、私見としては、平原君が「君子」の器であったとは認め難いし、「聖人」の中に入れられる余地もない。

### 3.3 魏の信陵君(魏の公子)

『史記』列傳の「魏公子列傳」の冒頭には、「魏公子無忌者 魏昭王子少子

而魏安釐王異母弟也 昭王薨 安釐王即位 封公子為信陵君（魏の公子である無忌は、魏の昭王の子の中の末子であり、安釐王異母弟である。昭王が死んで安釐王が即位すると、公子を封じて信陵君とした）、「公子為人仁而下士 士無賢不肖皆謙而禮交之 不敢以其富貴驕士 士以此方數千里爭往歸之 致食客三千人 當是時 諸侯以公子賢 多客 不敢加兵謀魏十餘年（公子の人となりは、情け深く、武士をもてなし、賢者にも愚者にも皆へりくだって交際し、自らが富貴であることを驕ることがなかった。それゆえ、武士は、数千里の彼方から争って帰来した。その食客は三千人に及んだ。その当時、諸侯は、公子が賢者で食客が多いことから、魏に対して兵を向けることがないことが十年余りに及んだ）」とある。

魏の安釐王 20 年、秦が趙の長平の戦に大勝し、更に邯鄲の包囲戦に入っていた頃、合従策により援軍を駆けつけるべき魏王が逡巡・躊躇していることにみかね、その食客らの助言に従い、その助力を得て、信陵君がこの世の者とは思われない行動に出た結果、秦が邯鄲の包囲戦を解いて撤退することとなった。それによって、歴史に名を残すこととなった。とても常人にできることではない。

その後、信陵君は、趙に留まったが、魏の安釐王 30 年、魏が危機に直面していることを知って故国に戻り、安釐王から上將軍の地位を拜命して闘い、秦軍を破り、秦軍を函谷関の西まで押し戻した。『史記』列傳の「魏公子列傳」によれば、「當是時 公子威振天下 諸侯之客進兵法 公子皆名之 故世俗稱魏公子兵法（この当時、公子の威信は天下に轟き、諸侯の食客で兵法を進める者は全て公子の名を付した。いわゆる『魏公子兵法』である）」という<sup>17)</sup>。

しかし、信陵君は、その後、諫言により失脚する。司馬遷は、信陵君の最後について、「公子自知再以毀廢 乃謝病不朝 與賓客為長夜飲 飲醇酒多近婦女 日夜為樂飲者四歲 竟病酒而卒 其歲 魏安釐王亦薨（公子は、解任の真の理由に気づくと、病気だと言って参朝せず、賓客と飲みふけり、

強い酒を飲み、婦女を近づけ、日夜飲み明かすこと4年にして酒の病で没した。その年、魏の安釐王も死んだ」と記している<sup>18)</sup>。言うまでもなく、魏は、その後間もなくして滅びた。

紙数の関係で詳細は省略するが、『史記』列傳の「魏公子列傳」の中に示されているその事跡が真実であるとするれば、中国戦国時代の他の三君と比較すると、魏の信陵君（魏の公子）は、「君子」であると言える。少なくとも、高い身分に生まれておりながら、能力主義を貫徹して卑賤の身分の者と親しく交わり、しかも、通常のものであればプライドを傷つけられて堪忍袋の緒が切れるところを我慢し続け、温和な表情を示し続けることができたという資質は尋常ではない。

### 3.4 楚の春申君

『史記』列傳の「春申君列傳」の冒頭には、「春申君者 楚人也 名歇 姓黃氏 游學博聞 事楚頃襄王（春申君は、楚の人である。名は歇、姓は黄氏である。学問を修めて博識であり、楚の頃襄王に仕えた）」とある。知性の点では、孟嘗君及び平原君と同じである。『史記』列傳の「春申君列傳」では、「春申君客三千餘人 其上客皆躡珠履以見趙使 趙使大慚（春申君には食客3,000人があり、その上位の食客は全て真珠の飾りをつけた靴を履いて趙の使者と応接したので、趙の使者は面目を失った）」と記され、徐幹『中論』の「亡國」には「楚春申君亦好賓客 敬待豪傑 四方並集 食客盈館（楚の春申君もまた食客をもてなすことを好み、豪傑を敬って侍らせ、四方に居並ばせ、食客が館に溢れた）」とある<sup>19)</sup>。

頃襄王は、黄歇（春申君）を使いに出した。黄歇は、秦の人質となっていた懐王が既に死亡しており、秦が楚を撃つ準備を進めていることを知って、長文の上奏文をしたため、秦の昭王を説き伏せようとした。その文面は、非常に長いものであり、『史記』列傳の「春申君列傳」中の約半分を占める分量である。非常に興味深い。

頃襄王が病になったとき、黄歇（春申君）は、自らの身を賭して、秦の人質となっていた太子完を楚に逃れさせた。頃襄王の死後、太子完は、考烈王として即位した。考烈王は、黄歇を宰相として封じ、以後、春申君と呼んだ。その後、春申君は、魯の国を攻めて滅ぼすなど、楚の国力を増強することに務めた。

しかし、『史記』列傳の「春申君列傳」によれば、そのあとが良くなかったとされている。すなわち、春申君の食客である李園の甘言に乗り、李園の妹に自分の子を身籠らせた上で楚の考烈王に献上したとされるのである<sup>20)</sup>。この部分については、呂不韋と秦始皇帝との関係の類似性から史実ではないとの見解もある。真相は、神のみぞ知るとしか言いようがない。

春申君は、身から出た錆とはいえ、自分の食客である李園の放った刺客により、口封じのために暗殺されるという無残な結果を招いた。そのことについて、司馬遷は、太史公曰くとして、「吾適楚 觀春申君故城 宮室盛矣哉 初 春申君之說秦昭王 及出身遣楚太子歸 何其智之明也 後制於李園 旄矣（私は、楚へ赴き、春申君の故城を見た。宮室は、盛んだったのであろう。若い頃の春申君が秦の昭王を説得し、自分の身を犠牲にして、楚から差し出されていた太子を帰国させたのは、その知性の何と輝かしいことであったことか。その後李園の言いなりになってしまったのは、要するに、老いぼれたのであろう）」と酷評している。

上記のとおり、『史記』列傳の「春申君列傳」にある李園関連の記述を100%鵜呑みにすることは危険ではあるが、おそらく、李園の手の者によって暗殺されたということは史実であろうと考えられる。結局、春申君は、慢心によるものかどうか、その食客を完全に支配下に置いていたとは言えない<sup>21)</sup>。春申君は、「君子」とは認め難く、「聖人」とも認め難い。

### 3.5 小 括

以上から、中国戦国時代の「四君」、すなわち、孟嘗君、趙の平原君、楚

の春申君及び魏の信陵君の「君」がもつ共通のニュアンスは、「何らかのかたちで王の血をひいている」、「知者である」、「多数の食客を養うことを好む」、「宰相の任に就いた」というものではあり得ても、魏の信陵君（魏の公子）を例外として、「君子である」または「聖人である」というニュアンスを含まないということを理解することができる。司馬遷が例外的に「君子」または「聖人」と呼び得る魏の信陵君の列伝を「魏公子列傳」と題したことは意味があると思われる。「君」ではなく、「公子」なのである。

結論として、司馬遷は、『史記』を編纂するにあたり、①「食客三千人」と形容することのできる富貴の君を4名選んだ、しかし、②その4名の中で「君子」と評価できるのは、魏の信陵君（魏の公子）のみで、③他の3者（齊の孟嘗君、趙の平原君、楚の春申君）はそうではないと評価していると考えることができる。

## 4 東洋画（南画）の画題としての「四君子」

### 4.1 画題としての「四君子」の概念のはじまり

中国の水墨画の技法が雪舟によって日本にもたらされたことは事実であるけれども、それは、山水画を主体とするものである。日本国における「四君子」の描画の歴史は必ずしも明確ではない。確かに、遅くとも戦国時代には南蛮人や華人の商人を介して相当多数の花鳥絵画が中国から輸入され、また、国内でも描かれたことを推定することができる<sup>22)</sup>。しかし、日本国の戦国時代までの時期において、上述の画題の概念としての「四君子」の概念が存在したと断定するに足りる史料はない。

南画の題材としての「竹」、「梅」、「蘭」等の存在を明確に認識可能となるのは、戦国時代が終了し、戦のない時代が300年もの長きにわたって続いた徳川幕府の時代以降であると考えられる<sup>23)</sup>。

『古事類苑』文學部四十三の「繪畫上」の「四君子」の項は、宋代の紫石

『畫藪後八種四體譜』を引用し、「南宋の畫開けて、又ゑがくところの物同じからず、第一山水を旨として、墨竹、墨蘭、墨梅、墨菊の類、或は蘭亭の圖、或は西園雅集圖、人物は關羽の像、或は美女の圖等也」としている<sup>24)</sup>。遅くとも安永年間頃（1770～1780年頃）には『畫藪後八種四體譜』の版本<sup>25)</sup>が広く流通していたと推定されるから、日本国において「竹、蘭、梅、菊」を重要な画題とする認識は、その頃には普及していたと推定することができる。

また、『古事類苑』では引用されていないが、『芥子園画傳』にも蘭譜、竹譜、梅譜及び菊譜が附属している。『芥子園画傳』は清朝の康熙帝の代に発案され、1600年代末頃に王概によって大幅に図録が増補されて再編集された書物である。遅くとも安永年間頃には日本国に輸入され、その写本や版本が流布されていたと推定される。『芥子園画傳』は、それまでの人物図や山水図を主体とする絵画の題材の流行が草花へと移行する契機となった書籍であると一般に評価されている<sup>26)</sup>。

しかし、「竹、蘭、梅、菊」という画題を「四君子」と呼ぶ慣行があったか否かは判然としない<sup>27)</sup>。『古事類苑』において、『畫藪後八種四體譜』をもって「四君子」の論拠とするのは、『古事類苑』の編者の見解を反映するものに過ぎず、歴史的事実を直接に証明するものではない。『畫藪後八種四體譜』の版本には、「蘭譜」、「艸譜」、「梅譜」及び「菊譜」が附属する。「艸譜」は「竹」の画法を示すものである。「蘭譜」は、明らかに春蘭属 (*Cymbidium*) のラン科植物の画法を示すものである。『畫藪後八種四體譜』に附属する「蘭譜」、「艸譜」、「梅譜」及び「菊譜」の存在によって、これら4種の植物が画題として重要なものであるという認識が日本国に導入されたことまでは理解することができる。

結局、「竹、蘭、梅、菊」という画題の観念が確立されたのは、中国の清代以降であると考えるのが妥当である。そして、うがった見方をすると、日本国における絵画の題材としての「四君子」なる概念は、この『古事類苑』によって広まったのではないかとも考えられる<sup>28)</sup>。即ち、それは、幕末～明

治時代以降のことである<sup>29)</sup>。

他方、繪畫研究会（代表・石川寅吉）編『南宋畫法 第一輯』（繪畫研究会、1921）の「畫蘭淺説」の章には、その根拠（典拠）を特に示すことなく、「四君子と云へば世人も知る如く蘭・竹・梅・菊である」、「畫蘭は、四君子中にて殊に君子の面影を現すもので」、「竹は、直竿堅節にして能く剛、風説に屈せず、常に緑にして」、「梅は、清烈潔白、剛健にして寒に堪へ」、「菊は（中略）百花の後に開きて、猶ほ尊とく、中正黄色、美にして香氣あり、霜雪の爲に節を變ぜず」云々とある。おそらく、同書こそが、現代まで至る日本国の絵画（特に南画）における「四君子」の語義のルーツとなっているものと推定される<sup>30)</sup>。

#### 4.2 現代中国語における用例

現代中国語における植物としての「四君子 (sì jūn zǐ)」の例となり得るものを探してみると、中国麻雀（麻将）の花牌の中にそれを見つけることができる。実際に流通しているものには多種多様なものがあるので確実ではないけれども、現在流通し、日本国にも輸入されている中国麻雀の花牌では、確かに、「竹（筍）、蘭、梅、菊」の4種とするものが多い。ただし、その「菊」の牌の図柄がキク科 (*Aster*) の植物の花の図柄ではなく、「椿」または「山茶花」のようなツバキ科 (*Camellia*) の植物の花の図柄となっており、牌に表示されている「菊」の文字とその図柄とが一致していない例もある。また、「竹、蘭、梅、菊」の4種の「花牌」を「四君子牌」と呼ぶ例も現代中国語の中にあるようである。

他方、現代中国における画題としての植物を扱った書籍を調べてみると、「蘭」を扱うものが比較的多く、「竹」と「梅」がこれに次ぎ、「菊」はやや少ない<sup>31)</sup>。中国人の好みが古くから艶やかで大輪の「牡丹」のようなボタン科 (*Paeonia*) の植物や「木蓮」のようなモクレン科 (*Magnolia*) の植物の花を主体とするものであることが影響を与えているのかもしれないと考えら

れる<sup>32)</sup>。

なお、以上のものとは別に、現代中国においては、石英のような綺麗な石材を研磨し、「蘭、竹、梅、菊」の図案をあしらって製造された護符のような土産物の類もある。

### 4.3 中国古典における用例

杜甫、李白及び白居易の代表的な作品の中に「四君子」は含まれていない。以下、竹、梅、菊の順にそれらを題材とした中国の詩の中から幾つかあげてみる。ただし、網羅的ではない。また、「蘭」がどの植物種を指すのかが明瞭でないことが多いので、「蘭」の詩は除外した<sup>33)</sup>。

(竹)

李白(唐)『慈姥竹』「野竹攢石生 含煙映江島 翠色落波深 虛聲帶寒早 龍吟曾未聽 鳳曲吹應好 不學蒲柳凋 貞心嘗自保」

白居易(唐)『東樓竹』「瀟灑城東樓 繞樓多修竹 森然一萬竿 白粉封青玉 卷簾睡初覺 欹枕看未足 影轉色入樓 床席生浮綠 空城絕賓客 向夕彌幽獨 樓上夜不歸 此君留我宿」

李世民(唐)『賦得臨池竹』「貞條障曲砌 翠葉貫寒霜 拂牖分龍影 臨池待鳳翔」

王安石(宋)『和耿天騫以竹冠見贈四首』「竹根殊勝竹皮冠 欲著先須短發乾 要使山林人共見 不持方帽禦風寒」

蘇轍(宋)『次韻子瞻係禦史獄獄中榆槐竹柏 竹』「故園今何有 猶有百竿竹 春雷起新萌, 不放牛羊觸。雖無朱欄擁 不見紅塵辱 清風時一過 交戛響鳴玉 淵明避紛亂 歸嗅東籬菊 嗟我獨何為 棄此北窗綠」

唐寅(明)『對竹圖』「簞瓢不厭久沉倫 投箸虛懷好主人 榻上氈毼黃葉滿 清風日日坐陽春 此君少與契忘形 何獨相延厭客星 苔滿西階人跡斷 百年相對眼青青」

劉溥（明）『蘭竹畫』「湘江雨晴白雲濕 湘妃愁抱香蘭泣 望望夫君去不還 佩珠落儘無人拾 碧天秋冷明月多 千裡洞庭橫白波 請君莫唱竹枝曲 水遠山長其奈何」

（梅）

杜甫（唐）『江梅』「梅蕊臘前破 梅花年後多 絕知春意好 最奈客愁何 雪樹元同色 江風亦自波 故園不可見 巫岫鬱嵯峨」

李白（唐）『宮中行樂詞其七』「寒雪梅中儘 春風柳上歸 宮鶯嬌欲醉 簷燕語還飛 遲日明歌席 新花豔舞衣 晚來移彩仗 行樂泥光輝」

白居易（唐）『春風』「春風先發苑中梅 櫻杏桃李次第開 薺花榆莢深村里 亦道春風爲我來」

韓偓（唐）『梅花』「梅花不肯傍春光 自向深冬著豔陽 龍笛遠吹胡地月 燕釵初試漢宮妝 風雖強暴翻添思 雪欲侵凌更助香 應笑暫時桃李樹 盜天和氣作年芳」

王安石（宋）『梅花』「牆角數枝梅 凌寒獨自開 遙知不是雪 爲有暗香來」

薛嵎（宋）『山中梅花』「詩人魂在梅花上 不比垂楊管鶯離 野鶴聲聲聲漸遠 定應飛報月明知」

皇甫汸（明）『梅花落』「早見梅花落 江南春未遲 如何上苑葉 不似故園枝 影怯臨妝夜 香憐逐吹時 無人問消息 獨自寄相思」

（菊）

陶淵明（東晉）『和郭主簿二首 其二』「芳菊開林耀，青松冠岩列。懷此貞秀姿，卓為霜下傑」

杜甫（唐）『秋興』「玉露凋傷楓樹林 巫山巫峽氣蕭森 江間波浪兼天沸 塞上風雲接地陰 叢菊兩開他日淚 孤舟一繫故園心 寒衣處處催刀尺 白帝城高急暮砧」

李白（唐）『九月十日即事』「昨日登高罷 今朝更舉觴 菊花何太苦 遭此兩重陽」

白居易（唐）『重陽席上賦白菊』「滿園花菊鬱金黃 中有孤叢色似霜 還似今朝歌酒席 白頭翁入少年場」

李世民（唐）『賦得殘菊』「階蘭凝曙霜 岸菊照晨光 露濃晞晚笑 風勁淺殘香 細葉凋輕翠 圓花飛碎黃 還持今歲色 複結後年芳」

王安石（宋）『殘菊』「黃昏風雨打園林 殘菊飄零滿地金 攆得一枝猶好在 可憐公子惜花心」

蘇軾（宋）『浣溪沙』「畫隼橫江喜再遊 老魚跳檻識清謳 流年未肯付東流 黃菊籬邊無悵望 白雲 鄉裡有溫柔 挽回霜鬢莫教休」

鄭思肖（宋）『畫菊』「花開不並百花叢 獨立疏籬趣未窮 寧可枝頭抱香死 何曾吹落北風中」

李廌（宋）『山行見菊』「野色芬敷洗露香 籬邊不減禦衣黃 繁英自翦無人插 應笑鐵潛兩鬢霜」

唐寅（明）『題菊花圖』「黃花無主為誰容 冷落疏籬曲徑中 儘把金錢買脂粉 一生顏色付西風」

以上の詩から理解できることは、詩人が各人各様に感じたことを文にし、あるいは、それぞれの個別の情況に下における風雅や情趣を詩に託しているのであって、「四君」等の觀念に支配されながら詩作をしているわけではないということである。それぞれの詩に個別の独自の風情と詩情というようなものがある。

#### 4.4 梅花無盡蔵

万里集九『梅花無盡蔵』（1506年頃）<sup>34)</sup>は、日本国の中世における漢文の題材としての植物の認識・理解を得るための貴重な資料である<sup>35)</sup>。

「畫軸二首 一幅梅 一幅竹」に「天外除梅外 無花如是香 彼三千第一 素面不勞粧」とあり、「扇面 陸放翁」に「宋末乾坤 皆戰塵 片時無地可 斟春 扇中 自是梅花海 千億化身留一身」とあり、「曾言廉蘭竹精神」に

「不比尋常紅紫春 兩虎遂無問穴鬪 長令全趙勢吞」とある。また、「次韻興彦龍 菊詩」には「印金禮樂菊無芳 一亂吹塵辭洛陽 此地安閑君試見 籬猶東晉以前霜」とあり、寺院等において菊が実際に栽培されていた可能性を示唆している。

「代人雞旦賀疏」には「蘭芳」との語が見えるが、この「蘭」が何を指すのかについては明確ではない。また、「妙珍以遠大姉畫像贊」には「蘭之芽」とあるが、これは植物を指すものではない。

しかし、以上のほか、4種の植物を示す概念としての「四君」または「四君子」のニュアンスを漂わせるような表現は全く含まれていない。

#### 4.5 小 括

中国において、清朝以降、「蘭、竹、梅、菊」の4種が画題として好まれるようになったことは確実であると言える。それらをまとめて「四君子」と呼称する現代中国語の例があることも認めることができる。ただし、4種の植物を常に1セットとして用いる例は、麻雀牌や土産物の類、水墨画の教材等に限定される。

## 5 ま と め

以上のとおり、中国戦国時代の人物を示すものとしては、「気品のある」または「高貴な」とのニュアンスを含むという意味で「四君」または「四君子」を用いることは誤りである。

日本国における「四君子」の用例の典拠またはその起源は、必ずしも明確ではない。日本国には遅くとも安永年間頃までには画題として「蘭、竹、梅、菊」を重視する考え方が導入されたと推定される。しかし、それを「四君子」と総称する語の用法は、明治以降に確立された可能性が高い。

## 《注》

- 1) 山田哲平『反訓誥学—平安和歌史をもとめて』（書肆心水、2017）、同「高麗仏画と光」明治大学教養論集 397号 79-95頁
- 2) 原文にはふりがなが付されているが、省略した。
- 3) 渡辺崋山の『四君子自画賛』が真筆であるか否か、現存するか否かに関しては、浅学にして不詳。田原市博物館の収蔵品には含まれていない。同博物館には、渡辺小華作とされる「四君交結図」が収蔵されている。なお、渡辺崋山の業績に関しては、鈴木清節編纂『崋山全集 第一巻』及び『崋山全集 第二巻』（崋山會、1910）、日比野秀男（日本アートセンター編）『渡辺崋山』（新潮社、1997）、月山照基『渡邊崋山の逆贖作考』（河出書房新社、1996）が参考になる。
- 4) 『史記』世家の「陳涉世家」にも同様の文がある。『史記』世家の和訳としては、小竹文夫・小竹武夫訳『史記世家（上・下）』（ちくま学芸文庫、1995）がある。
- 5) 賈誼と司馬遷は、いずれもその人生の中で讒言による屈辱の時期を経ており、そして、いずれも楚の屈原に共鳴したという共通点をもっている。賈誼は、『文選』に収録されている「弔屈原賦」を残し、司馬遷は、『史記』の中に「屈原賈生列傳」を残した（夏井高人『楚辞』の蘭）やまくさ 66号 81-183頁参照）。
- 6) 『後漢書』列傳の「張王种陳列傳」に「皓上疏諫曰 臣聞堯舜立敢諫之鼓 三王樹誹謗之木 春秋採善書惡 聖主不罪芻蕘 騰等雖干上犯法 所言本欲盡忠正諫 如當誅戮 天下杜口 塞諫爭之源 非所以昭德示後也」とある。
- 7) 『史記』本紀の「孝文本紀」に「古之治天下 朝有進善之旌 誹謗之木 所以通治道而來諫者」とあり、『漢書』紀の「文帝紀」にも同様の記述がある。
- 8) 殷（商）～周代の文化に関しては、陳捷『甲骨文字と商代の信仰—神権・王権と文化』（京都大学学術出版会、2014）、ロータール・フォン・ファルケンハウゼン（吉本道雅訳）『周代中国の社会考古学』（京都大学学術出版会、2006）が参考になる。
- 9) 司馬遷は、『史記』世家の「魯周公世」、『史記』列傳の「李斯列傳」及び「蒙恬列傳」の中でも「四君」との語を用いているが、文脈が異なる。「魯周公世」では、魯の定公が立ったことによる季氏の帰趨の文脈で、文公・成公・襄公・昭公を示す趣旨で「於今四君矣」が用いられ、「李斯列傳」では、能吏登用の文脈で「繆公、孝公、惠王、昭王」があげられ（前掲『広辞苑（第六版）』の説明②参照）、「蒙恬列傳」では、刑殺の文脈で「秦穆公、昭襄王、楚平王、吳王夫差」があげられている。これらの用例は、単に「四君」というだけでは、「気品が高い」、または「高潔である」というニュアンスを含まないことを示している。「四君」は、司馬遷によってそのような評価が加えられた文脈においてのみ、そのようなニュアンスをもつ。
- 10) 夏井高人『荀子』の蘭）らん・ゆり 449号 11-34頁、450号 17-44頁、451号

25-52 頁参照。

- 11) 該当する列伝の和訳としては、小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝一』(岩波文庫, 1975)がある。
- 12) 自分の額を地面に叩きつけるようにして拝する古来の礼法を指す。
- 13) 中国古代の迷信の一種で、5月生まれの男子はその父を害し、女子はその母を害するとされた。端午の節句とは逆の発想となり、非常に興味深い。
- 14) このエピソードは、グリム童話にある「ブレーメンの音楽隊」の構成要素と共通する部分がかかなり多く、非常に興味深い。グリム童話の素材となった古い伝承の中には、非常に古い時代からの遊牧の民の興亡と共に、ユーラシア全域において存在した伝承の異なる形態での残滓が含まれている可能性があり得ると想像される (Sara Graça da Silva & Jamshid J. Tehrani, *Comparative phylogenetic analyses uncover the ancient roots of Indo-European folktales*, 20 January 2016. DOI: 10.1098/rsos.150645, C. スコットリトルトン・リンダ A. マルカー (辺見葉子・吉田瑞穂訳)『アーサー王伝説の起源 — スキタイからキャメロットへ』(青土社, 1998), 井本英一『神話と民俗のかたち』(東洋書林, 2007) 参照)。なお、これらの点に関しては、夏井高人『『懐風藻』の蘭(上)』*艸史雑誌* 1巻1号 1-66頁でも触れた。
- 15) 同様のことは、『史記』列傳の「廉頗藺相如列傳」の中で、廉頗の盛衰と食客の離合集散に関しても書かれている。
- 16) 『史記』世家の「趙世家」孝成王七年に「廉頗免而趙括代將 秦人圍趙括 趙括以軍降 卒四十餘萬皆阬之 王悔不聽趙豹之計 故有長平之禍焉 (大将の廉頗を免じて趙括に代えた。秦の軍隊は趙括を包囲した。趙括の軍は降伏し、兵士40万人余りは全て生き埋めとされた。)」とある。
- 17) 『魏公子兵法』については、誰が考えても「あさましい」と評するしかないのであるが、現代においても事情はさして変わらない。
- 18) 秦の特殊部隊による謀略、すなわち、毒殺の可能性は否定できない。
- 19) 王充『論衡』の「儒増」にも「齊之孟嘗 魏之信陵 趙之平原 楚之春申君 待士下客 招會四方 各三千人」とある。
- 20) 『韓非子』の「姦劫弑臣」参照。なお、その後、李園らの一族が皆殺しにされて滅亡したことについては、劉向『列女傳』孽嬖の「楚考李后」に記述がある。
- 21) 前掲徐幹『中論』の「亡國」参照
- 22) 三上進「戦国武将と宋画「花の絵」(常盤山文庫蔵)」*芸術新潮* 22巻3号 112-116頁 (1971) 参照
- 23) 梅澤精一『増補日本南畫史(第三版)』(洛東書院, 1933) 参照
- 24) 中村茂夫『中國畫論の展開 晉唐宋元篇』(中山文華堂, 1965) 628-635頁によれば、南宋末の趙孟堅(1199-1264)は、松・竹・梅・水仙を愛し、鄭思肖(1241-1318)は、蘭・竹・菊を愛したという。

- 25) 『畫薈後八種四體譜』の版本の画像は、早稲田大学図書館古典籍総合データベースの Web サイト上で公開されている。この版には、「蘭譜」、「艸譜」、「梅譜」及び「菊譜」のほか、「翎毛譜」及び「蟲魚譜」が附属している。「翎毛」とは、「鳥」のことである。この版本は、清朝の乾隆帝の時代以降に中国で刊行された版本をもとに日本国で作成されたものであると推定される。
- 26) 青木正児『青木正児全集第十巻 芥子園畫傳（譯）』（春秋社、1975年）参照
- 27) 小室翠雲『南画読本』（艸書房、1937）82頁は、「何時誰によって提唱されたものか、その出所、畫因などは、古書を調べてみても詳らかでない」としている。陰影のある表現である。
- 28) 毛利和美『水墨四君子の名画』（日貿出版社、1986）9頁は、「蘭・竹・梅・菊を四君子として扱うようになったのは、ずっと後世のことになります」としているが、その開始時期を明確に特定した記述はない。
- 29) 現代において「四君子」の画法を示す書籍としては、例えば、山田玉雲『四君子の描法（新装第2版）』（日貿出版社、2009）がある。
- 30) 畫譜集の標題として「四君子」を用いた例としては、井上勝五郎出版・浅井應翠画『四君子畫譜』（1880?）がある。国立国会図書館所蔵の『書画舫』（特60-452）の「乾の巻」の序には「四君者」とあるが、「坤の巻」の序には「川君子」とある。氏家幹人「書物方年代記（4）寛政七年～文化十年」北丸45号12頁によれば、寛政8年（1796）には『書画舫』が日本国に存在したらしいが、国立国会図書館所蔵品との内容的な同一性の有無は不明である。
- 31) 例えば、關国星『写意梅蘭竹菊画法』（天津楊柳青画社、2013）、郝良彬『名家画水墨蘭花』（天津楊柳青画社、2013）がある。
- 32) 陳学書編著『植物（中国歴代紋様經典系列）』（河南美術、2011）参照。
- 33) 前掲『『楚辞』の蘭』、夏井高人「中国古典文献にみえる石斛の産地」やまくさ64号137-177頁参照。
- 34) 市木武雄『梅花無尽蔵注釈』（統群書類従完成会、1993-1994）が参考になる。同書は、全4巻の注釈本体と別巻及び索引の合計6巻で構成されている。
- 35) 『梅花無尽蔵』以外の史料に関しては、寿舒舒「日本中世の古記録から見る中国画人・絵画の記載」東アジア文化交渉研究5号473-488頁（2012）が参考になる。

（なつい・たかと 法学部教授）